

研修概要

後半の研修は主に＜東アジアにおける植民地主義の文化的表象＞及び＜政治・芸術・死＞をめぐっての考察に集中した。

関連した学術研究会である

－21世紀アジアにおける美学の再思惟、その概念と観点

(10月26日、27日、ソウル延世大学)

－拡張されたアジア

(11月10日、11日、光州ビエンナーレ)

－文明の転換期における韓国近現代思想の再検討

(2019年1月18日、ソウル創作と批評社研究所)

－新人種主義と難民、その烙印

(2019年3月23日、ソウル延世大学)

－＜残傷の音＞をめぐって

(2019年3月26日、ソウル延世大学)

関連現場及び展示会の

－記憶の裂け目

(10月30日～31日、ソウルArko美術館)

－2018光州ビエンナーレ、想像された境界たち

(11月8日～12日、光州ビエンナーレ展示場、アジア殿堂)

—NOSUNTEK写真、Bloody Bundan Blues

(11月11日、光州市立写真展示館)

—見つめる、KOGILCHUN写真1990-2018

(2019年1月12日、済州現代美術館)

などに参加、研修を行った。さらに前期から続いた、済州4・3研究所、及び済州島

4・3平和記念財団の資料調べ、関連文献探索などは中心主題である〈政治と死〉に

関わる意味ある成果を得た。考察を深め、研修成果は6月東京藝術大学で行うシンポジウムで発表、
また今年度まで小論形式で出版予定（岩波書店）である。